

【研究ノート】

西洋近世美術における
アジアの表象としてのガンジス川の河神像
—ベルニーニ《四つの河の噴水》をめぐって

落 合 桃 子*

はじめに

イタリアの首都ローマのナヴォーナ広場に、17世紀イタリアで活躍した建築家・彫刻家ジャンロレンツォ・ベルニーニ (Gian Lorenzo Bernini, 1598-1680) (以下、ベルニーニ) 設計による《四つの河の噴水》(1648-1651年) (図1) がある。古代ローマ時代のオベリスクを中央に据えた噴水で、ピラミッド型の岩山がかたどられ、そこに四体の河の寓意像が配されている¹。同時代人の美術研究家バルディヌッチ (Filippo Baldinucci, 1625-1696) やベルニーニの息子ドメニコ (Domenico Bernini, 1657-1723) も書き残しているように、これらはドナウ川・ナイル川・ガンジス川・ラプラタ川の河神像であり、四大陸 (ヨーロッパ・アフリカ・アジア・アメリカ) の表象となっている (Baldinucci “The Life of Bernini” 36; Bernini 163)²。西洋の近世美術では、大航海時代の世界観の拡大などを背景に、世界の四部分ないし四大陸を主題とした作品が数多く制

* 福岡大学人文学部准教授

¹ このオベリスクは「パンフィーリのオベリスク」と呼ばれ、1650年にアタナシウス・キルヒャー (Athanasius Kircher, 1602-1680) が560頁にわたる著作を刊行している (Kircher)。D'Onofrio 222-229、伊藤 41-42頁も参照のこと。

² バルディヌッチについては、浦上論文を参照のこと。

作された (Pigler 521ff.)。本作品は四大陸を河川で表現した作例の一つである。

本稿が目にするのは、《四つの河の噴水》におけるガンジス川の河神像 (図2) である。なぜ、四大陸中のアジアの河川として、ガンジス川が取り上げられたのか。本作品に関する主要研究に 1967 年のフーゼ (Huse) や 1974 年のプライメスベルガー (Preimesberger) などがあるが、ガンジスの河神像についてはこれまで詳細な分析がなされていない³。また広く西洋美術におけるガンジス川の表象に関する研究も管見の限り見当たらない。

そこで本研究ノートでは、ベルニーニ《四つの河の噴水》のガンジス川の寓意表現を取り上げ、そこに込められた含意を明らかにすることにより、西洋近世美術におけるアジアの表象の一端を示す。まず 1 で、西洋美術における河神像について説明する。2 では、ベルニーニ《四つの河の噴水》を詳しく見ていく。3 では、西洋においてガンジス川がいつ頃から知られるようになり、どのように河神像として造形化されたのかを明らかにする。最後に 4 で、本作品のガンジス川の河神像について、キリスト教のアジア布教の観点から考察する。

1. 古代の河神像とルネサンス期の再発見

ヘシオドス『神統記』(337-371 行)にあるように、ギリシア神話では、大洋オケアノスがすべての河川の父と見なされていた (ヘシオドス 45-49 頁)。ホメロスもまた、世界はオケアノスに取り囲まれていて、河川はその一部と考えていたと、ストラボンが記している (ストラボン I 21-26 頁)。

古代の西洋美術では、オケアノスや河川などが人間の姿で造形化された。こうした河川の寓意像が河神像 (River God, Flussgott) と呼ばれる⁴。ヘレニズム期以降になると、横臥像が主流になる (Klementa; Bober and Rubinstein 109)。

³ 《四つの河の噴水》のドナウ川の河神像に関する短報に Christian がある。

⁴ 古代の河神像については Weiss; Klementa; Bober and Rubinstein 109-117; Appuhn-Radtke を参照のこと。

代表的な作例に《マルフォリオ像》（図3）がある（Bober and Rubinstein 110f., no. 64）。アトリビュート（持物）として水甕やコルヌコピア（豊穰の角）を手をしている作例も多い。単独の彫刻作品だけでなく、メダルや神殿の破風彫刻、凱旋門の浮彫彫刻、石棺、モザイクなどにも河神像が見出される。

中世のキリスト教美術においても、樂園の四つの河やヨルダン川などが河神像として表されたが（Marle 285ff.; Rubinstein 257f.）、ルネサンスになって再び古代の河神像に関心が寄せられるようになる。ルービンシュタイン（1984年）によれば、その大きなきっかけとなったのは、1512年1月の《テヴェレ川》（75/150年、ルーヴル美術館蔵）（Bober and Rubinstein 113f., no. 66）の発見であったという。その後、イタリアのモンテ・カヴァッロにあった別の一对の河神像（Bober and Rubinstein 112f., no. 65）が《ナイル川》と《ティグリス川》として、ローマ・カンピドリオの丘にあるミケランジェロ（Michelangelo Buonarroti, 1475-1564）設計のセナトリオ宮階段に設置されることになる（Rubinstein 259）。

こうして古代の河神像が再発見されると、ルネサンス・バロック期の芸術作品に河神像のモチーフが多く登場するようになる。代表的な作例に、フランドルの画家ルーベンス（Peter Paul Rubens, 1577-1640）《四大河》（1615年頃）（図4）がある⁵。浜辺に集う4人の河神が描かれている。豊かな髭髪を蓄えた筋骨隆々たる男性たちは川のニンフのナイアスとも見なされる女性たちをそれぞれ伴っている。画面左上に、植物の冠を被って權を持つ男性と、髪飾りと薄いベールを身につけた女性がいる。その下には、穀物の冠をつけた灰白色の髪の男性の後ろ姿が描かれている。傍らには黒い肌の女性がいて、ルビーのような赤い宝石のある豪華な装飾品をつけて、こちらを振り向いている。画面右奥

⁵ 本作品はこれまで《四大河》のタイトルで知られてきたが、本稿ではビュットナーの作品総目録に従い《四大河》とする（Büttner 67-77. I, no. 1）。本作品に関する日本語文献として高橋論文も参照のこと。関連する河神像の歴史についても触れられている。

に、赤い実をついた冠を被った男性の上半身と女性の顔が見えている。そして画面右端に、大きな水甕を背に左向きに座す男性と、白い肌の女性が描かれている。画面手前ではワニと虎が向かい合い、牙を見せて互いを威嚇している。

この作品は長らく、世界の四大陸とその河川を表すと考えられてきた。河神像についても左上から右に、ヨーロッパのドナウ川、アフリカのナイル川、アメリカのラプラタ川（あるいはアマゾン川）、アジアのガンジス川と結びつけられてきた（Rooses 57-58, no. 834; Exh. cat. “Rubens” 75-76, no. 19; Jaffé 205-206, no. 302）。しかし1993年にマクグラスが本作品を「楽園の4つの川」とする説を提示した（McGrath）。そこでは、これまでガンジス川とされてきた右端の男性像が、虎のモチーフなどからティグリス川の河神と見なされた。本作品は今日《楽園の4つの川》として所蔵先のウィーン美術史美術館で展示されている（Gruber et al. 190-191, cat. 49）。そしてその後17世紀なかばになって、ベルニーニがローマで《四つの河の噴水》を制作することになるのである。

2. ベルニーニ 《四つの河の噴水》

《四つの河の噴水》は、ローマ教皇インノケンティウス10世（在位1644-1655年）の発案によって制作された。ボッロミーニ（Francesco Borromini, 1599-1667）らの設計案も知られるが、最終的にベルニーニが委嘱を受けた。1647年あるいは遅くとも1648年には制作が開始され、本噴水は1651年6月に除幕された（Balducci “The Life of Bernini” 35ff.; Frascchetti 179ff.; Brauer and Wittkower (Text) 47ff.; Huse 12, 33f.; Wittkower 268ff.）。

大きな円形の水盤の中央にピラミッド型の岩がある。岩は内部が穿孔されてグロット（洞窟）となっており、4つの脚部に分かれている。この四部分の上には、四大陸を流れる擬人像、すなわちドナウ川（ヨーロッパ）・ガンジス川（アジア）・ナイル川（アフリカ）・ラプラタ川（アメリカ）の擬人像が置かれてい

る（Baldinucci “The Life of Bernini” 38; Bernini 163）。人物像および紋章は大理石でできており、それ以外の部分には石灰華が用いられている（Wittkower 268）。

噴水の南西側に豊かな髭髪を有する男性が座している。この人物はドナウ川の河神像とされる。上半身を右側に向けて上方に掲げられた紋章の下部を支えている。これは教皇インノケンティウス 10 世の紋章で、ここには出身家のパンフィーリ家の印であるオリーブの枝を加えた鳩のモチーフが見える（Bernini 163）。

北西側では、禿頭の男性が右腕で体を支えながら、教会の方に向かって開いた右掌を高く掲げている。右足首には帯状のアンクレットを付けている。この男性像はラプラタ川の河神像とされている。

北東側の男性像は、布で頭部を隠しながら、上半身を右側に向けて、上方にある紋章の下を右手で支えている。ヤシの木が一本、ピラミッド型の岩の頂点に向かって伸びている。この人物は、同時代記述でもナイル川の寓意像と説明されている。（Baldinucci “The Life of Bernini” 37; Bernini 163; Preimsberger 128ff.）。

そして、南東側の男性像が、本稿が注目するガンジス川の河神像（図 2）である。長いあご髭を生やし、頭にヤシの冠を被り、左手で持った長いオールに右脚をかけて座っている。ベルニーニの息子ドメニコも「その（ガンジス川の）膨大な水量を暗示する大きな權を握っている」と記述している（Bernini 163）。

河神像が座す岩の下部には、動物たちが表されている（Huse 28, 39ff.）。西側のドナウ川とラプラタ川の間に、前足を上げた馬の上半身が、東側のナイル川とガンジス川の間には、ライオンの頭部がある。ラプラタ川の座す岩の後方にある尖った口と甲殻の皮を持つ動物はアルマジロ（Tatù）であり、ガンジス川の下部に頭部を見せる動物はドラゴンと考えられている。水面からは魚も姿を現わしている。

本作品のための構想図や素描、習作模型も残されている (Brauer and Wittkower (Text) 47ff, (Plates) 25b-31; Brinckmann 40-47)。河神像自体はすでにウィンザー城所蔵の素描に登場しているが、四大陸の河川として個々に造形化されるようになるのは習作模型の段階になってからである (Preimesberger 123ff)。

四体の人物像は、ベルニーニの習作に基づいて、4人の異なる彫刻家たちによって制作された。ガンジス川の人物像の作者について、同時代人のバルディヌッチやベルニーニの息子ドメニコは「Monsù Adamo」と書き記しているが (Baldinucci “The Life of Bernini” 38; Bernini 163)、フラスケッティの研究 (1900年) 以降、彫刻家クロード・プッサン (Claude Poussin, Claudio Porissimi) と考えられている (Bernini 352, note 20; Frascchetti 181; Huse 45; Wittkower 269)。この人物について詳細は不明であるが、1643/44年から1654年までローマで活動していたことが知られており、1661年9月27日にパリで没したとされる (“Poussin, Claude.”; Moriconi 475)。

ではいったいなぜ、《四つの河の噴水》において、ガンジス川が四大陸中のアジアの河川に選ばれ、ヤシの葉の冠を被った河神像として表されたのか。次章では、西洋世界においてガンジス川がどのように受容され、造形化されたのかを見ていく。

3. ガンジス川の河神像

ガンジス川は、ヒマラヤ山脈からインド北東部を流れてベンガル湾に注ぐ大河である。紀元前4世紀にマケドニア王国のアレクサンドロス3世 (大王) はインド遠征を行ったが、ガンジス川までは到達していない。「アレクサンドロスもヒュバシス川より先へは、ついに踏みこむことがなかった」と紀元2世紀のギリシア人歴史家アッリアノス『インド誌』(4.1) に記されている (アリッ

アノス『本文篇』925頁)⁶。

ターン（1923年）によれば、ガンジス川流域に実際に滞在し、この川に言及した最初のギリシア人ないしヨーロッパ人は、イオニア出身のメガステネス（前350年頃から前290年頃）であるという（Tarn 94f.）⁷。この人物はセレウコス1世の使節としてインドのマウリヤ朝チャンドラグプタの宮廷に派遣されたが、この王朝の都パタリプトラはガンジス川中流域に位置していた。「メガステネスが記すところではガンゲス（ガンジス）とインドスと、この最大級の両河のうちではガンゲス川の方が、その大きさにおいてインドス川をはるかにしのいでいる」とアリアノスは書いている（アリアノス『本文篇』925頁）。

ガンジス川はアジアのみならず、ヨーロッパ、アフリカを含めた世界において最も大きな河であると、古代ローマ期には考えられていた。ストラボンのように記している。「三大陸にわたっておよそ名のある川のなかでも一番の大河がこの河（ガンジス川）で、そのつぎがインドス河、三、四がイストロス、ナイル両河だということにはじゅうぶんな合意がある」（ストラボンII 401頁）。

その他、古代ローマの詩人オウィディウスの叙事詩『変身物語』には、ガンジス川の河神の娘の妖精リムナイエの子供であるアティスという青年も登場する（オウィディウス 181頁）。

では、ガンジス川の河神像はどのように造形化されたのだろうか。クレメンタ（1993年）はヘレニズムおよび古代ローマの河神像を河川名ごとに分類し、ナイル川やテヴェレ川を中心に22の河川の河神像を取り上げているが、ここにガンジス川は含まれていない（Klementa）。ガンジス川は古代美術において少なくとも流行した主題ではなかったと言える。

ルネサンス以降の美術作品には、ガンジス川の寓意像が見出される。寓意表

⁶ 古代ギリシア・ローマにおけるインドに関する文献資料や記録については、中村 551-569頁を参照のこと。

⁷ メガステネスについては、アリアノス『註釈篇』1813頁、註35、中村 557-562頁も参照のこと。

現の事典であるチェーザレ・リーパ (Cesare Ripa, c. 1555-1622) 『イコノロジニア』 (1603 年) ではガンジス川の擬人像について以下のように説明されている。

ガンジス—厳格な容貌で、頭に棕櫚の冠を戴いている。他の川と同じように片側の壺に寄りかかり、反対側には屣がいる。ガンジス川はインド地方の巨大な川であり、楽園の水源に発している (リーパ 143 頁)。

リーパは、ミケランジェロの葬儀の際に描かれたガンジス川にも触れている (リーパ 143 頁)。フィレンツェのアカデミア主催によるミケランジェロの葬儀が 1564 年 7 月 14 日にサン・ロレンツォ聖堂で執り行われた。これについては同年に刊行された小冊子 (Rudolf and Margot Wittkower) が知られており、ヴァザーリも『美術家列伝』の中に書き記している。聖堂内はミケランジェロを哀悼して制作された多くの彫刻や絵画で装飾され、棺台の左右には、アカデミア会員の若手彫刻家による《アルノ川》と《テヴェレ川》の巨大な大理石像が置かれたという。ガンジス川の河神が登場するのは、フランチェスコ・デ・メディチに仕えた画家ベルナルド・ブオンタレンティ (Bernardo Buontalenti, c.1531-1608) による大型の絵画 (カンヴァス、現存せず) である。ヴァザーリは次のように書いている。

世界の三つの主要な地域の川の寓意像がこぞって悲しみに暮れ、「アルノ川」とともに共通の損失を悼み慰めるためにやってきたところを描いている。それらの川とは「ナイル川」「ガンジス川」そして「ポー川」であった。「ナイル川」はその目印として鰐とその地域の肥沃さを表わす麦の穂の冠を持っていた。「ガンジス川」は秃鷹と宝石の冠を、「ポー川」は白鳥と黒琥珀の冠を持っていた (ヴァザーリ 90-91 頁)。

このヴァザーリの記述から、世界の三地域の寓意として、ナイル川とガンジス川、ポー川が描かれたことがわかる。ガンジス像の持物として、禿鷹と宝石の冠が挙げられている。リーパは「宝石の花冠を戴いた老人で、他の川と同じように壺をもち、傍らにはグリフォンの鳥がいる」と説明している（リーパ 143 頁）。

フランチェスコ・プリマティッチョ（Francesco Primaticcio, 1504-1570）とニコロ・デッラバーテ（Nicolò dell'Abbate, 1509/12-1571）によるフォンテーヌブロー宮「オデュッセウスのギャラリー」のフレスコ装飾（1537 年頃～1560 年以降、1739 年に破壊され現存せず）にも河神像が見出される（Kreuzer, 高橋 45 頁；Béguin et al. 45-64）。第 10 番の区画の天井画では、《太陽の馬車を囲むホラたち》を中央にして、四隅の画面にそれぞれ一体ずつ河神像が配されていて、ドナウ川・ガンジス川・ナイル川・ラブラタ川と解釈されている（Béguin et al. 173-176）。いずれの河神も動物や幼子たちを伴っていて、ガンジス川の河神像はラクダとコルヌコピアとともに描かれている。ガンジス像の後ろに大きなコルヌコピアを抱く幼子がいて、画面右に横たわるラクダに 3 人の幼子たちが寄り添っている（Dimier 427, no. 20 ; Béguin et al. 174-175, fig. 75）。

ベルニーニ《四つの河の噴水》との関連が指摘されているのが、彫刻家ジャンボローニャ（Giambologna, 1529-1608）《オケアノスの噴水》（1570-75 年）（図 5）である（Wiles 103f.; Avery “Bernini” 196f.）。中央に立つオケアノス像の台座を取り囲んで、ヤシの葉の冠を被った若い男性と、短い髭髪の壮年の男性、そして禿頭に長い髭を持つ老人の座像が配されている。これらがナイル川・ガンジス川・ユーフラテス川の河神像であると、ボルギーニ（Raffaello Borghini）『休息』（1584 年）やバルディヌッチ『チマブーエ以降の素描美術家たちの消息』第 4 卷（1688 年）に記されている（Borghini 587; Baldinucci “Notizie” 123; Avery “Giambologna” 254, no. 9.）。それぞれの同定には諸説あ

るが (Dhanens 170)、ヤシの葉の王冠を被った青年の河神像をガンジス川と見なすワイルズの説 (Wiles 61, fig. 115) を本稿では支持したい。リーパ《イコノロジーア》の記述やベルニーニ《四つの河の噴水》においてもガンジス川はヤシの冠を戴いているからである。

このように、ガンジス川じたいはすでに古代から西洋世界でも知られていたが、ガンジス川の河神像は 16 世紀以降の作例が知られる。ベルニーニ《四つの河の噴水》もこうした作品の系譜に位置づけることができる。そして、この作品のガンジス川の寓意像について考えるため、ベルニーニやインノケンティウス 10 世と同時代に活動した一人の神学者の著作に注目したい。

4. ガンジス川とキリスト教のアジア布教

司祭で神学者のミケランジェロ・ルアルディ (Michelangelo Lualdi) は《四つの河の噴水》が公開された 1651 年、この噴水に関するパンフレット『パンフィーリの噴水の記録』を出版する (Lualdi “Fontana”⁸)。この 16 頁の小冊子では「ナイル川の賞賛」「ラプラタ川を祝す」「ナイル川の歓喜」「ガンジス川の喜び」の小見出しのもと、4 体の河神像について記述されている。ガンジス像については、「權を左手で握りしめ、その土地へと流れ込む 19 の支流の多くが航行可能であることを示している」とある (Lualdi “Fontana” 14)。

ルアルディはその後 1653 年に『福音の下にある東インド』を刊行する (Lualdi “L’India”⁹)。この本は、タイトルにあるように、ポルトガル領東インドを中心にカトリック布教の歴史をまとめたもので、フランシスコ・ザビエルの事績から始まって、インドや日本などにおけるキリスト教の伝道について記録されている。本書は教皇インノケンティウス 10 世への献辞を持ち、表紙には《四つの河の噴水》にも見られる教皇の紋章が大きく描かれている。

⁸ 本文献はフーゼの博士論文 (1967 年) でも再録されている (Huse 85-92)。

⁹ ルアルディの同書については、羽田の論考も参照のこと。

この本の冒頭では「東インド (L'India orientale)」の地理についての短い説明があり、ポルトガルの拠点が置かれた「ゴア」「コーチン」「サントメ」そして「ガンジス川からマカオまでの地域」「東方の大洋の島々」の小見出しが続く。「東インドはインダス川とガンジス川の間に挟まれていて、きわめて広大であり、ここには多数の王国や帝国がある」(Lualdi “L'India” Osservazione Geografica) と書かれている。「ガンジス川からマカオまでの地域」の箇所では「ガンジス川の河口にはベンガル王国があり、それから他の国々を通してマラッカに至る」(Lualdi “L'India,” Osservazione Geografica) と説明される。さらに「東方の大洋の島々」のところで日本も登場する。こうした記述より、インドから、ガンジス川を超えて、東南アジアの国々や中国、日本などが位置していると捉えられていたことがわかる。

こうしたアジアの地理認識は、天正遣欧使節でその名が知られる、イエズス会東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606) の『東インド巡察記』(1577/1580年)の中ですでに認められる。

当管区 (東インド管区) は我々の方法にしたがうと、ガンジス川よりも内側と外側 *citra et ultra Gangem* の2つの地方に分割される。(中略) 我々がインドと称しているのは、ガンジス川よりも内側の地方一帯のことである。ガンジス川よりも外側の地方を、通常、南部地方と称しており、マラッカ、マルコ、シナそして日本がある。(ヴァリニャーノ 30 頁一部改)

このヴァリニャーノの説明によれば、ガンジス川を境にして、インドと、さらに東に位置するマラッカや中国、日本などに分けられる。つまり、ガンジス川は、カトリック教会が布教活動を行ったインド、広くアジアの道標、こう言ってよければ象徴となっていたのである。

ガンジス川の河神像は、1594年6月14日のネーデルラント総督オーストリ

ア大公エルンストのアントワープ入市式における凱旋門の一つ「ポルトガル人の凱旋門」(図6)にも見出される(Bochius XVI-XXVII, 72ff., pl. 8-9; McGrath 76, 82, fig. 9)。ここでは、インドを含むポルトガル海上帝国の支配地域が擬人像として表現されている。最上部では海の神ポセイドンが馬に乗って、左手に三又の戈を持ち、右手で地球儀を高く掲げている。そして凱旋門の上部には、左からエビオピア、アフリカのマウレタニア、ブラジリア、インドがそれぞれ動物(象・ライオン・アルマジロ・犀)に乗った女性像として描かれている。注目すべきは、この凱旋門の背面である。最上部に王冠付きのポルトガル王国の紋章が置かれ、左右には半人半魚のトリトンの姿がある。そして門の上部に、左からテージョ(タホ)川、ガンジス川、ヒュダスベス(ジェルム)川、ラプラタ川の河神像が配置されているのである¹⁰。このうちガンジス川の河神像は、長い髭を生やし、先の尖ったヤシの葉を頭に戴いて、右手に權を持っている。左腕を水甕に載せて横たわり、手前には小型のワニのような動物の姿も見える。このガンジス川の姿は、水甕や動物を伴っていることを除けば、《四つの河の噴水》と共通している。ベルニーニのガンジス像の先例を、こうしたポルトガル領インドの寓意表現の中に見つけることができるのである。

むすび

ベルニーニ《四つの河の噴水》では、アジアの寓意としてガンジス川の河神像が登場する。ガンジス川はインドの河川としてヘレニズム時代から西洋で知られていたが、ガンジス川の河神像の作例は、ルネサンス以降の美術に見出される。リーパ『イコノロジーア』(1603年)では、棕櫚の葉の冠を被った横臥像として、ガンジス川が擬人化されている。ジャンボローニャ《オケアノスの

¹⁰ テージョ(タホ)川はイベリア半島最大の川で、スペイン中部に始まりポルトガルを流れて大西洋に注ぐ。ヒュダスベス川はインド北部に源泉を持ち、パキスタンを通ってインダス川に通じる。パンジャブ地方の五大河川の一つで、今日ではジェルム川と呼ばれる。

噴水》（1570-75年）の河神像の一つもガンジス川と解釈されている。

《四つの河の噴水》のガンジス川の河神像について考えるため、本稿では、神学者ルアルディの著作に糸口を求めた。ルアルディは《四つの河の噴水》に関する小冊子を出版した2年後、『福音の下にある東インド（L'India orientale soggettata al vangelo）』（1653年）を刊行している。ポルトガル領東インドを中心とするカトリック伝道の歴史について論じた本書では、インドがインダス川とガンジス川の間であって、ガンジス川の彼方に、マラッカや日本など島嶼部が広がっていると説明されている。こうしたアジア及びガンジス川の地理理解は、16世紀に刊行されたヴェリニャーノの『東インド巡察記』にさかのぼることができる。さらに、東アジアで海洋帝国を拡大していたポルトガルを主題とした「ポルトガル人の凱旋門」（ネーデルラント総督オーストリア大公エルンストのアントワープ入市式、1594年）には、ベルニーニ作品と同様の、ヤシの冠を被ったガンジスの河神像が登場する。

以上のように、ベルニーニの《四つの河の噴水》のガンジス川の河神像には、意味内容においても図像面においても、ポルトガル領インドないし広くアジアにおけるカトリック布教との関連が見えてくるのである。



図 1
ベルニーニ《四つの河の噴水》
1648-1651年、大理石、石灰華
ナヴォーナ広場、ローマ

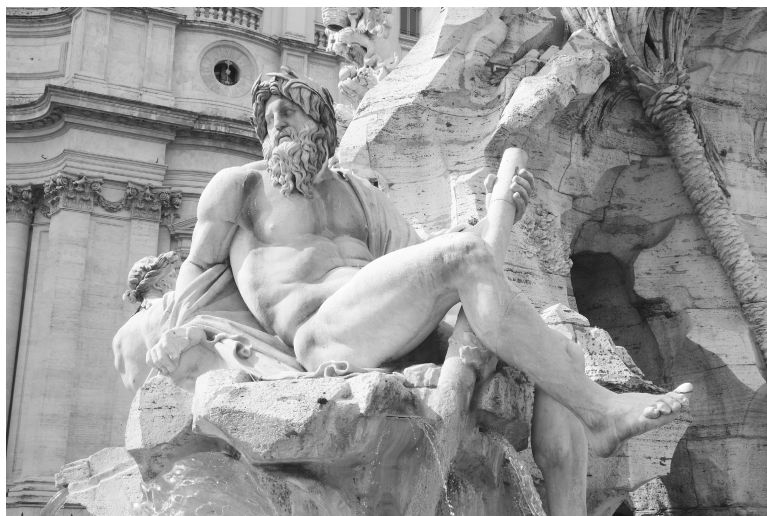


図 2 《四つの河の噴水》(部分) ガンジス川の河神像

【引用文献】

- Appuhn-Radtke, Sibylle. “Flußgott.” *RDK Labor* (Reallexikon zur Deutschen Kunstgeschichte), 2003, <https://www.rdklabor.de/w/?oldid=89275>. (最終閲覧日 2023年3月19日)
- Avery, Charles. *Giambologna. The Complete Sculpture*. Phaidon, 1993.
- . *Bernini: Genius of the Baroque*. Thames and Hudson, 1997.
- Baldinucci, Filippo. *Notizie de' professori del disegno da Cimabue in qua. Parte seconda del secolo quarto che contiene tre Decennali, dal 1550. al 1580*. Piero Matini, 1688.
- . *The Life of Bernini*. Translated by Catherine Enggass. Pennsylvania State University Press, 2006.
- Béguin, Sylvie, et al. *La galerie d'Ulysse à Fontainebleau*. Presses Universitaires de France, 1985.
- Bernini, Domenico. *The Life of Gian Lorenzo Bernini*. Translated by Franco Mormando. Pennsylvania State University Press, 2011.
- Bober, Phyllis Pray, and Ruth Rubinstein. *Renaissance Artists & Antique Sculpture. A Handbook of Sources*. 2nd ed., Harvey Miller, 2010.
- Bochius, Johannes. *The Ceremonial Entry of Ernst, Archduke of Austria, into Antwerp, June 14, 1594*. First Published Antwerp, 1595. Reissued by Benjamin Blom, 1970.
- Borghini, Raffaello. *Il Riposo*. Giorgio Marescotti, 1584.
- Brauer, Heinrich, and Rudolf Wittkower. *Die Zeichnungen des Gianlorenzo Bernini*. Heinrich Keller, 1931. Unabridged ed., Collectors Editions, 1970.
- Brinckmann, Albert Erich. *Barock-Bozzetti: Italienische Bildhauer/Italian Sculptors*. Vol. 2. Frankfurter Verlags-Anstalt, 1924.
- Büttner, Nils. *Rubens: Allegories and Subjects from Literature* (Corpus Rubenianum Ludwig Burchard 12). Vol. 1, Harvey Miller, 2018.
- Christian, Mary. “Bernini’s ‘Danube’ and Pamphili Politics.” *Burlington Magazine*, vol. 128, no. 998, 1986, pp. 354-55.
- Dhanens, Elisabeth. *Jean Boulogne. Giovanni Bologna Fiammingo*. Paleis der Academiën, 1956.

- Dimier, Louis. *Le Primatice*. Ernest Leroux, 1900.
- D'Onofrio, Cesare. *Gli obelischi di Roma*. Cassa di Risparmio di Roma, 1965.
- Exh. cat. *Peter Paul Rubens, 1577-1640*. Kunsthistorisches Museum Wien, 1977.
- Fraschetti, Stanislao. *Il Bernini: la sua vita, la sua opera, il suo tempo*. Ulrico Hoepli, 1900.
- Gruber, Gerlinde, et al., editors. *Rubens: Kraft der Verwandlung. Für Kunsthistorisches Museum Wien und das Städelsches Museum Frankfurt am Main*. Hirmer, 2017.
- Huse, Norbert. *Gianlorenzo Berninis Vierströmebrunnen*. Dissertation. Ludwig-Maximilians-Universität zu München, 1967.
- Jaffé, Michael. *Rubens: catalogo completo*. Rizzoli, 1989.
- Kircher, Athanasius. *Obeliscus Pamphilius*. Typis Ludouici Grignani, 1650.
- Klementa, Sylvia. *Gelagerte Flussgötter des Späthellenismus und der römischen Kaiserzeit*. Böhlau, 1993.
- Kreuzer, Ernst. "Erdteile VI." *RDK Labor (Reallexikon zur Deutschen Kunstgeschichte)*, 1965, <https://www.rdklabor.de/w/?oldid=89493>. (最終閲覧日 2023年3月19日)
- Marle, Raimond van. *Iconographie de l'art profane au moyen-âge et à la Renaissance et la décoration des demeures. Allégories et Symboles*. Reprinted by Hacker Art Books, 1971.
- McGrath, Elizabeth. "River-Gods, Sources and the Mystery of the Nile. Rubens's *Four Rivers* in Vienna." *Die Malerei Antwerpens: Gattungen, Meister, Wirkungen. Studien zur flämischen Kunst des 16. und 17. Jahrhunderts. Internationales Kolloquium Wien 1993*, edited by Ekkehard Mai, et al. Locher, 1994, pp. 72-82.
- Lualdi, Michelangelo. *Descrittione della Fontana Pamphilia*. Francesco Moneta, 1651.
- . *L'India orientale soggettata al vangelo*. Ignatio de Lazzari, 1653.
- Moriconi, Marina. "Poussin, Claude." *Gian Lorenzo Bernini. Regista del Barocco*, edited by Maria Grazia Bernardini and Maurizio Fagiolo dell'Arco, Palazzo Venezia, Skira, 1999, p. 475.
- "Poussin, Claude." *Bénézit: Dictionnaire critique et documentaire des peintres, sculpteurs, dessinateurs et graveurs*. Vol. 11. New ed., 1999.
- Roses, Max. *L'oeuvre de P. P. Rubens*. Vol. 4, Jos. Maes, 1890.

- Rubinstein, Ruth. "The Renaissance Discovery of Antique River-God Personifications." *Scritti di storia dell'arte in onore di Roberto Salvini*, edited by Cristina de Benedictis, Sansoni, 1984, pp. 257-263.
- Pigler, Andor. *Barockthemen: Eine Auswahl von Verzeichnissen zur Ikonographie des 17. und 18. Jahrhunderts*. 2nd ed., vol. 2, Akadémiai kiadó, 1974.
- Preimesberger, Rudolf. "OBELISCUS PAMPHILIUS: Beiträge zu Vorgeschichte und Ikonographie des Vierströmebrunnens auf Piazza Navona." *Münchener Jahrbuch der bildenden Kunst*, vol. 25, 1974, pp. 77-162.
- Tarn, W. W. "Alexander and the Ganges." *The Journal of Hellenic Studies*, 43, 1923, pp. 93-101.
- Weiss, Carina. *Griechische Flussgottheiten in vorhellenistischer Zeit: Ikonographie und Bedeutung*. Konrad Tritsch, 1984.
- Wiles, Bertha Harris. *The Fountains of Florentine Sculptors and Their Followers from Donatello to Bernini*. Harvard University Press, 1933.
- Wittkower, Rudolf. *Bernini: The Sculptor of the Roman Baroque*. 4th ed., Phaidon, 1997.
- Wittkower, Rudolf, and Margot Wittkower. *The Divine Michelangelo. The Florentine Academy's Homage on His Death in 1564. A Facsimile Edition of esequie del divino Michelangelo Buonarroti, Florence 1564*. Phaidon, 1964.
- 伊藤博明 「17世紀ローマのエジプトマニア—サンタ・マリア・ソブラ・ミネルヴァ広場のオベリスクをめぐって」『叡智のアリストピアー—オリエントから、そしてすべては、イタリアへ』(イタリア美術叢書VI〈知〉の環流)ありな書房、2022年、9-62頁。
- 浦上雅司 「フィリッポ・バルディヌッチの美術史観と絵画に関する公開書簡」『福岡大学人文論叢』第44巻第1号、2012年、1-54頁。
- 高橋裕子 「ルーベンス『四大陸』」『季刊みづゑ』第942号、1987年、42-47頁。
- 中村元 『インド史II』(中村元選集〔決定版〕第6巻)春秋社、1997年。
- 羽田孝之 「ルアルディ『福音の下にある東インド』」青羽古書店ホームページ
<http://www.aobane.com/books/606> (最終閲覧日 2023年3月17日)

- アッリアノス（大牟田章訳注）『アレクサンドロス大王東征記およびインド誌』本文篇、
註釈篇、東海大学出版会、1996年。
- ヴァザーリ（森田義之、越川倫明、甲斐教行、宮下規久朗、高梨光正監修）『美術家列伝』
第6巻、中央公論美術出版、2022年。
- ヴァリニャーノ（高橋裕史訳）『東インド巡察記』（東洋文庫734）平凡社、2005年。
- オウィディウス（中村善也訳）『変身物語（上）』岩波文庫、1981年。
- ストラボン（飯尾都人訳）『ギリシア・ローマ世界地誌Ⅰ・Ⅱ』龍溪書舎、1994年。
- ヘシオドス（廣川洋一訳）『神統記』岩波文庫、1984年。
- リーパ（伊藤博明訳）『イコノロジーア』ありな書房、2017年。

【図版出典】

- 図1・2 執筆者撮影
- 図3 Bober and Rubinstein.
- 図4 Wikipedia. https://en.wikipedia.org/wiki/File:Peter_Paul_Rubens_-_The_Four_Continents.jpg（最終閲覧日 2023年3月20日）
- 図5 Avery “Giambologna”.
- 図6 Bochiu.

本研究は、福岡大学研究助成部推奨研究プロジェクト（若手）（研究代表者：渡邊裕一、
課題番号：207101）によるものである。